

地震発生から 35 分、両親は自宅で津波にのまれました

午後 2 時 46 分、揺れが収まるとすぐに、父は山の頂上付近にある「尾崎神社」(図 1)へ車を移動しています。父はチリ津波(昭和 35 年)の教訓から、常にガソリンを満タンにする癖があり、この時も満タンの状態でした。「津波の際は車で逃げてはいけない」のです。津波が収まった後の移動手段として、車を逃がすことはルーティーンでした。また、皆が同じことを考えるので、高台へ上る細い道はたちまち車で埋まってしまいます。そうなる前に、まず車を移動させるのだとよく言っていました。

この時、釜石湾でも、船が転覆しないよう沖へ移動していたはずですが、実際は移動させる間もなかったようで、船が多数転覆しました。

高台から戻ると、波から機材や食材を守るため、テーブルの上に物をあげる作業をしています。父はチリ津波(昭和 35 年)の際、1 階が浸水する経験をしていました。

ここまでで、20 分程度かかっています。

それから、2 階の海側にある寝室(図 2)で、父は着替えをしています。外への避難に備えるため、汗だくになった体を拭き、服を着込むつもりでした。この時、母は 2 階の山側にある仏壇(図 2)で先祖の位牌を集めています。

父が上着を脱ごうとして窓を見ると、自宅前方の道路に、黒い水がちょろちょろと流れるのが見えたそうです。父は「上に逃げろ」と叫びながら 3 階へ向かいますが、母は、波の様子を見ようと寝室へ向かおうとします。父は母を止めて、3 階へ走りしました。

2 階から 3 階に上がる階段の途中で、2 人とも津波に追いつかれたそうです。足を取られながら、突き当り(山側)にある兄の寝室(図 3)に逃げ込みますが、扉の隙間から海水は入り込みます。大きなソファを扉に押し当てて、波をしのいだそうです。すると、床からも海水が入ってきました。2 階に入ってきた海水は逃げ場を無くし、2 階の天井と 3 階の床のフローリングを突き破ったのでした。水面の高さは腰まで達しました。

勢いが収まり、引き波が始まると、屋根裏部屋(4 階部分)に移動します。津波は第 1 波より、第 2 波の方が大きいと言われていたからです。屋根裏部屋は窓がありませんので、その高さまで海水が達すると、もう、逃げ場がありませんでした。波は第 1 波以上の高さまでは達することなく、また、建物も何とか持ちこたえました。

夕方になっても海水はなかなか引かなかったそうです。津波が収まった様子を見て、状況の確認をします。1 階に降りようとする、瓦礫で入り口は完全に塞がっていました。外に出るのを諦めるしかありませんでした。3 階の窓から、すぐ裏にいる避難道路にいる人達に、生存を伝えます。母は隣の建物に同じく閉じ込められた女性に「明日また声かけるからね」と励ましたそうです。

その後 2 階で食べられそうなものを探しますが、冷蔵庫内も電気ポットも海水が入っていました。3 階の押し入れ上部には来客用の布団があり、それを屋根裏部屋に運びました。そして、兄や私の部屋から服を見繕い、海水に浸かった衣服を着替えています。母は、私の高校の体育着を選びます。色は赤、私のフルネームが刺繍されているものです。

「次の津波が来たら、家は持ち堪えられるのだろうか。この真っ暗な中で、この高さまで波が来たら逃げられるのだろうか。」母は死を覚悟して、鉄筋の柱に自分の体を巻き付けます。もし家が壊れても、遺体が波に連れて行かれないように、もし、遺体が破損しても、身元がなるべく早く判別できるように、私たち兄弟が遺体を探し彷徨うことがないようにとの、親心のようなものだったようです。

服を着替えても、布団を被っても、体は温まらず、窓のない屋根裏部屋で、眠れぬ不安な夜を過ごしました。